

「ワルターの演奏会記録」

ロイヤル・フィルハーモニック協会

長い歴史と伝統に輝く、イギリスのロイヤル・フィルハーモニック協会の活動は、今から約百六十年前、一八一三年に始まりました。その協会が設立したロイヤル・フィルは、ベルリン国立歌劇場管弦楽団(一七五九)、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団(一七八一)、パリ音楽院管弦楽団(一七九五)に次いで古く、此の点ではウィーン・フィルもニューヨーク・フィルも(一八四二)敵いません。然し、残念な事には、財政難の為に、協会は此の由緒あるオーケストラを解散させて了い、その後は、ロンドン・フィル等の管弦楽団を随時雇って、その活動を継続させたのです。ロイヤル・フィルが解散したのは一九三二年で、同年五月にトーマス・ビーチヤムがロンドン・フィルを組織したので、此の二者は全然別個の団体であるとされておりましたけれども、両者のメンバーは相当共通しているのではないかと思われま

ワルターが初めて此のオーケストラを指揮したのは、一九〇九年三月でした。エセル・スミスの「難船掠奪者」の序曲を演奏し

ましたが、此の曲の素晴しさは、ワルターの指揮によって初めて証明されたと言われました。また、同年十一月にも同曲を再演しました。

因みに、此のシーズンに出演した著名指揮者としては、ニキッシュ、シュヴァイアール、エルガーが挙げられます。

さて、其の後のワルターのロイヤル・フィルハーモニック協会での活動の記録を入手しましたので、お知らせ致します。

- 一九二四・十二・四 ロイヤル・フィルハーモニー ウェーバー 歌劇「魔弾の射手」序曲
- モーツアルト 交響曲第三十五番「ハフナー」
- エルガー 交響曲第一番変イ長調
- ワーグナー 楽劇「マイスタージンガー」序曲

- 一九二六・十一・十八 ロイヤル・フィルハーモニー エセル・スミス 歌劇「難船掠奪者」第二幕への前奏曲
- シューマン 交響曲第一番 変ロ長調
- モーツアルト ピアノ協奏曲ニ短調K466(独奏マイラ・ヘス)
- プロコフィエフ組曲「三つのオレンジへの恋」
- ベートーヴェン レオノーレ序曲 第三番

- 一九三四・一・二十五 ロンドン・フィルハーモニー
- ベートーヴェン 「コリオラン」序曲
- 交響曲第六番「田園」
- 交響曲第七番イ長調

- 一九三九・一・十九 ロンドン・フィルハーモニー
- ウェーバー 歌劇「オイリアンテ」序曲
- R・シュトラウス 交響詩「死と変容」
- マーラー 交響曲 第一番

右のプログラムの中で最も興味を引くのは、プロコフィエフの組曲「三つのオレンジへの恋」ではないでしょうか。市販のレコードはおろか、実況・放送録音にも、ワルターのプロコフィエフは見当らないからです。また、一九二六年には既に、モーツアルトのK四六六の協奏曲を、マイラ・ヘスと協演して居る事です。それから、一九二四年十二月のコンサートは、ワルターがロイヤル・フィルを指揮して、初めて英コロンビアに録音を開始した時期と一致する様に思われます。

＊コートールドリサージェント・コンサート

コートールドリサージェント・コンサートに関しては、ワルターの自伝の中で述べられています。その一連の演奏会に於けるワルターの活動の一部が判明しました。

第四回目のシーズン(一九三二・一〇—一九三三・四)の最後を飾る演奏会が、三日間にわたって、ワルターの指揮棒の下に行

われました。(他の五回、十五日間のコンサートの指揮は全部マルコム・サージェント)

日時とプログラムは、左記の通りです。

- 一九三三・四・二四(月)、二五(火)、二七(木)。
- モーツアルト 交響曲第三十九番変ホ長調
- ワーグナー 楽劇「神々の黄昏」終曲
- ベートーヴェン 交響曲 第三番 変ホ長調「英雄」
- 独唱、フローレンス・オーストラル
- 管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニー

尚、当時のロンドン・フィルのコンサート・マスターは、ポール・ベアード。その他、オーボエの首席奏者は、レオン・グーセンス、クラリネットの首席奏者は、レジナルド・ケルです。

フリッツ・クライスラーの誕生日に

寄せられたワルターの祝辞

一九五〇年二月二日に、フリッツ・クライスラーは、七十五回目の誕生日を迎えました。その前夜に行われた晩餐会で、クライスラーと親しかったブルーノ・ワルターは、有名な指揮者兼練達のピアニストという二つの立場に立って、大要次の様な祝辞を述べました。尚、此の資料を提供して下さったのは、協会々員 [] 氏です。

「フリッツ・クライスラー君。君の姿を見て居ると、皆と同じ様に、君が音楽史上伝説的人物であるという事に私は気付くのです。

君が君自身の独特の雰囲気包まれて居る事と、フリッツ・クライスラーという名前が、世界中の全ゆる所で、好楽家にとって魅力の意味するという事が、どの様に起ったのかという事柄を、私達は深く考えて居るのではないだろうか。どうして？

(註、ワルターは、アメリカ風に云へばと註釈をつけて、*How come?* という表現を用いた。) 勿論、君の名声によって世界中の演奏会場は満員になったし、君は亦、ヨーロッパとアメリカを、北から南へ、東から西へと、くま無く楽旅しました。音楽会が催される程の都市で、フリッツ・クライスラーが、熱心な聴衆の為に演奏会を開かなかったという所が、地球上に一つでも存在するとは、私は信じて居りません。

けれども、その様な演奏会壇上に於ける、絶え間無い成功の連続という様な人生の外面的事実は、私達の友人(註、フリッツ・クライスラー)がどの様に於いて、あの様な高い地位に到達したかを、説明して呉れるでしょうか？ また、どの様に、私が前述した「伝説的人物」に、彼が成ったかを説明して呉れるでしょうか？ 此の事を理解する為には、私達は、彼の人生の道程の、内的且つ深遠な諸事実を理解しようと努めなければならぬのです。

友人諸君。今日、フリッツ・クライスラーに就いて、私が皆さんにお話をしなければならぬという事が判明した時に、私は先ず私自身と「密議」をこらしたのです。つまり、私は音楽に関する色々な記憶と、私達の友人に関する私の個人的な記憶とを、夫々呼起したのです。それは、ずっと以前の出来事でした。私達が共通の旧友の邸で、魅惑的な、而も人の心を生きた々とさせる

ヴァイオリンから聞えて来る音が、彼女自身の声だと感じるのです。私が此の幻想的なお話を物語ったのは、それが深遠なものであるのみならず、フリッツ・クライスラーの存在の中にある、真正の事実と思えるものの、詩人的フィクションであるからです。フリッツ・クライスラーがヴァイオリンを弾く時に、諸君には彼の声が見えるでしょう!! 彼が唱って居るのが聞えるでしょう!! 諸君が、彼が奏する此の上無く輝しい楽節や、三度音程や、オクターヴや、フラジオットをお聞きになる時でさえ、「フリッツがどんなコロラチュエラを聞かせて呉れるか、良く聴いて御覧。」と言って良いのです。彼の歌というものは、ヴァイオリンとの神秘的な一致なのです。彼は、弓の為の右手と、指板の為の左手を持って、生れて来たのです。また、彼の魂は(前世からそれを知っていた)、音楽の基本要素の為に生れて来たのです。

彼の演奏を初めて聴いた時から、私は何時も音楽そのものの、内奥の魂を聴いて居る様な印象を受けたのです。彼が歌う音色の美しさ、彼のリズムの魅力、彼の表現の自然な単純性、そういったものを通して、音楽の此の魂は私に話しかけて来たのです。と言うのは、単に演奏をするだけでなく、彼こそは音楽そのものなのです。彼は、夫々の固有の領域に住んで居る、何か神話の中に現われる神々の中の一人である様に、私には思われるのです。彼の場合、旋律という基本要素の中に、生き、そして住んで居るのです。フリッツ・クライスラーにとって、演奏をするという事は、鳥にとって空を飛ぶという事、また、魚にとって、泳ぐという事と同じで、其の事が、聴衆に投げかけられる魅力、また彼の演奏会の束の間の出来事を、深く心に刻まれて消える事の無い

”ベルリンの宵”を過ぎた時の、私達二人の姿が目前に見えて来たのです。クライスラーは、しばしば行った様に、ディナーの後で、まずピアノに向って坐りました。何というピアノの演奏だったでしょう!! 見るからに真正の音楽家で、ピアノの名手の様な!! それから、夜も更けて私達の気分が、いやが上にも生き生きと盛上った時クライスラーは、ケースからヴァイオリンを取出し、弾き始めるのでした。さて、どの様に述べたらよいのでしょうか？ 彼は、単にヴァイオリンを弾いただけではありません。彼はヴァイオリンに成ったのです。いや、ヴァイオリンがフリッツ・クライスラーに成ったと言った方が良いでしょう。私は、E・T・A・ホフマンの幻想的な物語の事を考えて居りました。オッフエンバッハの歌劇「ホフマン物語」の主人公として御存じの、同じ名前のホフマンです。此のオペラの第三幕は、自分とヴァイオリンとの間に神秘的な関係を感じて居る一人の少女の物語りなのです。物語りそのものは、オペラの台本では骨抜きにされているので、もともと「顧問官クレスベル」という題名で、詩人ホフマンが書いた作品に依って話をしましょう。顧問官クレスベルは、ヴァイオリンを収集し、勉強して居ます。彼は、先ずヴァイオリンをばらばらにし、それを組立てから弾くのです。彼が集めた沢山のヴァイオリンの中に、殊に美しいのがあって、綺麗な声の持主であるその少女が唱う時、父親はそのヴァイオリンで、伴奏するのです。それから、その少女は病いの床に伏し、歌を唱い続ける事を禁止されます。けれども、そのヴァイオリンと一体感を持って居た彼女は、「お父様、私はもう一度唱いたいの。」と言って、父にヴァイオリンを弾いて呉れる様に頼むのです。そうして、顧問官クレスベルがそのヴァイオリンを弾くと、その娘は、

経験に変化させる魔力といったものを説明する基本的な特質である事を、私は確信して居るのです。フリッツ・クライスラーが現われ、ヴァイオリンと弓を手に取り、其の時代の人々の耳に、彼の、美と、のどかさ、愛情と、楽しさと、変容と、幸福の歌を響かせた時に、音楽の世界の上に光を投げかけていた星は、思へば幸運な星でありました。

SP 復刻盤の聴き方の一考察

SP又はSPの復刻盤は、皆さんの様にしてお聴きでせうか。昔の78回転の付いたステレオセットの解説書やレコード雑誌にきたま出るSPの聴き方としては、かならずと云って良い位、高音をカットしてスクラッチ・ノイズを減して聴く様に書いてあります。それも一つのゆき方でせう。しかし私は反対です。それでは、SPに入っている演奏の生々しい楽音は聴けません。逆に私は低音を落とし、ものによっては高音を上げて聴きます。この様にしますと、イコライザーの関係でとかく低音が強く出がちなSP再生のバランスを良くし、且つ又モーターゴロを消す役目もします。(勿論モノラル専用カートリッジにSP用針がついたものでプレーするのが前提です。ステレオ用カートリッジにSP針をつけたのでも聴けない事はありませんが、ノイズが倍増され、鑑賞にたえません。)

この方法は、最近ビアニストの故野辺地瓜丸氏が同じ主張をとなえてSPを聞いておられた事を知り、意を強くした次第です。

SPに入っている高音はせいせい67千ヘルツとされていま
す。処がこの周波数以上を完全カットしますと、音質がふやけて
寸づまりになってしまいます。素人でよく判りませんが、カット
した高い周波数の中には倍音と云った要素が多分に含まれていて、
音質・音色を変えてしまう結果をまねているのではないかと等
と想像しています。

前おきが大変長くなってしまいました。日本ワルター協会の
SP復刻盤、例えば第一回配布のハイドンの「軍隊」や「奇蹟」
はどの様にしてお聴きでせうか。私は最初の頃MMタイプの、マ
イクロのカートリッジで聴いていました。そしてウィーンの弦は
かなり良好に再録されているもの、SPよりもダイナミック・
レンジが狭く、音の陰影のとぼしさに不満がありました。これは
カッティングにも問題があるのかもしれませんが、SPよりも感
銘が薄い事はいなめませんでした。

音の再生には、カートリッジとアンプとスピナカーの特性が組
合わされて音の良否が決りますが、その後私はまず音の入口であ
るカートリッジをいじってみました。MM型のテクニカ、セラミ
ックのリオン、MC型のデンオン等で聴きくらべをしてみました。
その結果、音に厚味のあるMCタイプのカートリッジでアンプの
低域を補強する事により、迫力ある立派な演奏になりました。例
へばオルトフォンのQ425D等が良好な結果を生むのではない
でせうか。私はデンオンのPUC3のマグネットをベースに手造
りのMC型モノラル専用カートリッジで、バスを517デシベル
上げて聴いています。前述のSPの時はバスを切ると云った事と
相反しますが、LP化の場合は途中工程で音のバランスが変る事
を考えますと、かならずしも一方程式ではゆかない様です。QR

こんな工合で、ワルター存命の一九六〇年頃一度フアン・レタ
ーをカリフォルニア・ビヴァリー・ヒルズの自宅に出したところ
程なくクリスマス・カードにワルター直筆のサイン入りで返事が
来ました。全くもって、一介の誰やらも知れぬ私等にまで、世紀
の大指揮者がいちいち返事をくれるとはと、今更ながら噂にたが
わぬヒューマニストである事を知り、このカードを終生大事にし
ようと保存しております。

現代は、カラヤンやショルティ等鋭く且つ、迫力に富んだ指揮
者のレコードが一般受けする世相の様ですが、そんな中でワルタ
ーの様な完全円満な人格の芸術家が殆ど見当らなくなった現在、
彼の残してくれたレコードが、より大きな存在価値を持って来て
いるのではないかと思っております。最後に貴会の益々の発展を
お祈りします。

ワルターとベートーヴェンの

「第五」 其の他

(京都府宇治市)

(前略)

さて、少し私の「ワルターII第五」について述べさせて下さい。
勿論、専門家の人から見ればバカ気していると思われるかもしれ
ませんが、(元来私はレコードを聞く前にジャケットの解説は読
みません。その演奏に対して先入観を持つのが恐ろしいからです。)

盤のあるものは、ハイを上げる事によって音が生きてくるものがあ
ります。

皆さんも、御自分で色々聴く方法を研究されてはいかがでせうか。
思わぬ音楽の感銘を発見することがあります。

會員短 信 宛

(長崎市)

毎回、ワルター協会会報を送っていただき有難うございます。
会の活動状況やLP録音以前の珍しい吹込盤を知り、大きな喜びを
感じております。私のレコード・コレクションの中で、ワルターの
ものと云えば、やはりニューヨーク・フィルを指揮したモーツアル
トの交響曲3番「ハフナー」、同39番、40番、41番「ジュピター」
等が最高の水準にあるものと思っております。これ等のレコードは
勿論モノラル録音ですが、盤がかなりすり減って来る程、幾度と
なく愛聴して来ました。全体的に円満な人格を感じさせる演奏様式
で、現代社会のリアルで、ともすれば鋭角的になり勝ちな人間交流
の中で、夢とロマンを感じさせてくれる意味で貴重な存在だと思
います。他にフランチェスカッティのヴァイオリンによる同じくモ
ーツアルトのV協奏曲第3番と第4番も愛好しております。これはフ
ランチェスカッティがワルターに敬意を表してワルターのベースに
乗り、ゆったり、ふくいくとした流れの中に、若きモーツアルトの
天使の楽想をいかに描き出してきていて、全く私の大好きな
一枚です。ワルターの陶酔の声も聴きとれ、余計興味をそそられま
す。

彼の「運命」は実に穏やかで、美しい限りです。(NYフィルの
ものと少し違った角度でとらえているようですね。)聞いていてゆ
っくりと自然に曲に引込まれてゆく自分が不思議でならない。聞い
た後何時も思うのです。何回きいても新鮮さを失なわないのも、他
の指揮者と違う処です。フルトヴェングラー、トスカニーニ(彼ら
は素晴らしい芸術で私も大変尊敬しており、常にワルターと聞き比べ
ています。)を聞くと、聴衆である私の方も疲れてしまっていて、其の
後期間を置かないと、どうも聞く態勢が取れないのが実情です。

ワルターの「運命の動機」へのアタックは実に爽やかです。曲自
体の大きさ(精神の高さ、力強さ)でも表現しませうか。)に沿
って徐々に盛り上げてゆくその芸術には常に感激し、又その暖かさ
には人々を豊かな心にしてしまう魔力が存在しているかの様です。
特に2楽章でのワルターは、彼の持味を全て出し尽している感じが
します。特にチエロの歌わせ方には素晴らしいものがあり、他のどの
演奏家でも真似の出来ないユニークな演奏です。この楽章こそワル
ターそのものといった処ではないかと思えます。他のどの楽曲に於
いてもワルターが見せる、チエロへのアプローチは細やかな神
経のゆき届いた歌があり、愛があります。本当に愛情を持った人に
しか出来ない奏法だとも思えます。(勿論、他の演奏家に愛がない
と言っているではありません。)

彼を評して私自身は、夜空に降りそそぐ星の群れの様だと友人達
に言っております。ワルター、トスカニーニ、フルトヴェングラー
が、もし他の職業に従事していたら、トスカニーニは地質学者、フ
ルトヴェングラーは海洋学者、そしてワルターは天文学者だと私は
思います。トスカニーニには真実を深く追究する(化石によって年

代を判断する)傾向にあり、フルトヴェングラーも同じですが、彼には海の底に漂う神秘性が存在します。ワルターは天上に散在する星の様な美しさがあります。つまり二人の巨匠は、真実という点に向って進むのに対して、ワルターはある一点より出発して宇宙の広がり発展する。だから単に彼らを比較して聞くと、ワルターには深い精神力に欠けると思ってしまう。私には、それがたまたまなく腹立たしい時があります。又、トスカニーニやフルトヴェングラーの後継者らしきものはよく現われるのですが、ワルターに関しては全くそれはありません。ワルターの持つ深い愛情に一步たりとも近づけない何かがあり、彼の音楽を他の誰からも侵害させない本当に強い精神力がそうさせているのでしよう。

(後略)

「昭和4年度後期研究用録音資料刊行」

昨春秋、左記の資料を刊行致しました。

BWS一〇〇七 R・シュトラウス「交響詩」三曲

「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯」

ワルター指揮 ロスアンゼルス・フィル(一九五〇)

「ドン・ファン」ワルター指揮

ベルリン・フィル(一九五〇)

「死と変容」

ワルター指揮 NBC交響楽団(一九五一)

此の中、「ドン・ファン」と「死と変容」は、別の交響楽団によるレコードが市販されていますが、「ティル」は全く別のソースが皆無なので、フレッシュな興味を呼び起しました。また、ロス

適当なホールを御存じの方は御一報下さい。

□ 会報第3号でお知らせした様に、私達の長友宇野功芳氏は、ワルターのレコードに関する著作を御執筆中でしたが、目出たく昨年十一月末に音楽之友社から上梓されました。此の著書は氏の著作生活中一大ピークを成すもので、一人の演奏家のレコードを、殆ど全部聴いて、而も録音順に批評を加えるという方法は、今迄に見られなかったものです。ほう大な録音を遺した演奏家が多いし、一人の演奏家に就いて書かれた書籍は数えきれない程出版されました。けれども、たった一人の演奏家の全録音にスポット・ライトをあてて、その演奏の歩みに全頁を費した書物は他にありません。フルトヴェングラー、トスカニーニ、クライスラー、コルトーにさえ、此の様な様式による書物は無いのです。それを思えば、ワルターは幸せな演奏家でした。

また、単に市販されたレコードのみを対象としたものではなく、それ以外の、当協会刊行の研究用録音資料や米国ワルター協会刊行レコードのみならず、放送録音まで包含してある処にユニークな特色があります。未だお読みでない方には、御一読をおすすめします。

□ ワルターのディスコグラフィに関して、新しい情報が入りましたのでお知らせします。

○ 一九三二年録音の、シゲティ及びブリティッシュ・S.Oとの協演によるベートーヴェンのV協奏曲は、その年の四月から五月にかけて録音されたものです。従って、それ以前のB.S.Oの録音は四月に行われ、その後のワグナーの「名歌手」徒弟達の踊りは、五

アンゼルス・フィルとの協演も、種々のニュースでは聞及んで居ましたが、実際にその録音を聴く事が出来るのは素晴らしい体験だと思います。「ドン・ファン」は、既に二種の録音が市販レコードの中に見られますが、(ロイアル・フィルとNYフィル)、戦後のベルリン・フィルを、ワルターが指揮した所に期待が待てるものでした。「死と変容」もNYフィルとの協演のレコードが比較的容易に入手が可能ですが、NBC・S.Oとの協演は、これまた珍しいものです。また、期待だけではなく、実際に夫々名演であった事は、大体同じ時代に、夫々性格や技術レヴェルの異なる三つのオーケストラを駆使したものであるだけに、興味深く、感じ入らざるを得ません。

BWS一〇〇八 マーラー交響曲第四番ト長調

ワルター指揮 ウィーン・フィル(一九六〇・五・二九)

(ソプラノ独唱 エリザベート・シュヴァルツコップ)

BWS一〇〇一の「未完成」交響曲と同じ時の演奏で、長い間刊行を望まれていたものです。演奏の出来栄えに就いては、何の言葉も挿入する必要は無いと思います。NYフィル盤(一九四五)と比較する事は興味深い研究課題と思われれます。興味深い事は、NY版のソプラノはデジ・ハルバン(セルマ・クルツの娘)、ウィーン版のそれはシュヴァルツコップ(マリア・イヴォーギョンの弟子)である事です。つまり、どちらも云わばワルターの孫弟子なのです。

「珠玲 仁 雅」

□ 会場難のために、第九回例会の開催が困難となっております。

月に行われたと推察されます。(会員川合四朗氏の提供による資料)
○ 一九三七年十二月録音とまで判明したV.P.Oとの協演によるベートーヴェンの「田園」は、同月五日に録音された事が判明しました。
○ 一九三八年録音のL.S.Oとの協演によるベートーヴェンの「コリアン」序曲が、同年九月に録音された事が判明しました。これにより、シューマンの「第四」を除く、L.S.Oシリーズは全て同年九月録音という推定が出来る様になりました。

○ 一九四一年録音の、ロッテ・レーマンとの協演による、シューマンの「詩人の恋」のSP版のマトリックス番号が、梅野幸一氏の御好意により判明致しました。是に依ると録音順は曲自体の順序とは全然合っておりませんが、一応まとめると左記の様になります。
XCO三三三七八、XCO三三三七九、CO三三三八〇、XCO三三三八一、CO三三三八四。

○ 既に会員諸兄のお手もとにお届けしました、ワルターの録音順デスコグラフィに、左の通り訂補を行いますのでお書き込み下さい。

七頁 ベートーヴェン「皇帝」協奏曲 一九三四・一〇・六

二頁 同 第五交響曲XCO三二二一〇を三二二〇〇に訂正。

一三頁 メンデルスゾーン V協奏曲 マトリックス番号不明を、

XCO三四七三九一四五に訂正。

一三頁 同 「スケルツォ」同不明をXCO三四七四六に訂正。

一四頁 シューベルト 交響曲第七番ハ長調 同不明を、

XCO三六一八一一九二に訂正。

一四頁 マーラー「亡き児を偲ぶ歌」 一九四九・一〇・四